

中世の信仰 — 鎌倉時代以降の人々の信仰 —



寅子石 県指定

市内からは死後の極楽往生(ごくらくおうじょう)を願う当時の武士・民衆の信仰の一端を窺(うかが)わせる板碑(いたび)が現在までに174点確認・出土しています。板碑(いたび)は、主に供養塔として使われる石碑の一種で、「板石卒塔婆(いたいしそとうば)、板石塔婆(いたいしとうば)」とも呼ばれます。寅子石に代表される武蔵型板碑は、秩父産の緑泥片岩を加工して造られるため、「青石塔婆(あおいしとうば)」とも呼ばれます。この時期、仏教が当時の武士たちに鎌倉仏教として広く信仰され、武蔵武士の本拠地であった埼玉県内には現在、約2万基にのぼる板石塔婆があり、質・量ともに全国一の規模を誇っています。基本構造は、板状に加工した石材に梵字=種子(しゅじ)や被供養者名、供養年月日、供養内容を刻んだもので、頭部に二条線が刻まれますが、実際には省略されるものもあるようです。また、末期の小さい板碑に法名と没年月日を刻んだ簡単なものは、中級階層の庶民たちの墓塔と思われま

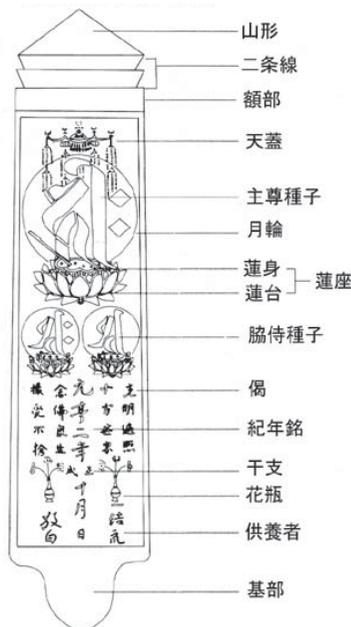
す。分布地域は、関東を中心に日本全国に分布していますが、鎌倉武士の本拠地とその所領に限られ、鎌倉武士の信仰に強く関連すると考えられています。造立時期は、鎌倉時代～室町時代前期に集中しています。現在知られる板碑では、埼玉県熊谷市(旧江南町)須賀広発見の嘉禄3年(1227)のものが最も古く、埼玉

県内に古い板碑が集中している傾向が認められます。市内で最も古いものは、弘安8年(1285)銘で、新しいものは永禄元年(1558)ですが、全国的な傾向と同様で14～15世紀が中心のようです。

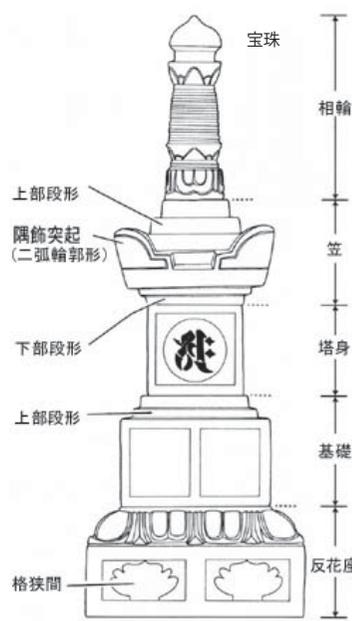
市内では、特に「寅子石(とらこいし)」と呼ばれる延慶4年(1311)銘板碑が大字馬込字辻谷に所在し、高さ4mの埼玉県下で2番目に大きい板碑です。唯願法師が真仏法師(親鸞の直弟子)の報恩供養のために建てられたものです。この他に延元元年(1336)の南朝銘の年号が刻まれた板碑も存在し、市内にも南北朝の争乱の影響があった可能性も想定されます。板碑は文字資料が数少ない蓮田の中世の状況を窺い知ることのできる資料の一つです。

宝篋印塔(ほうきょういんとう)は、墓塔・供養塔などに使われる仏塔の一種で、五輪塔(ごりんとう)と共に多く造られる石造物の一つです。

宝篋印塔の最上部の棒状の部分は相輪(そうりん)と呼ばれる部位で頂上に宝珠を乗せ、その下に請花(うけばな)、九輪(宝輪)、伏鉢などと呼ばれる部分があります。相輪は宝篋印塔以外にも、宝塔、多宝塔、層塔などにも見られるもので、単なる飾りではなく、釈迦の遺骨を祀る「ストゥーパ」の原型を残した部分です。相輪の下には笠があり、この笠の四隅には隅飾(すみかさざり)と呼ばれる突起が造られます。笠の下の方形の部分は、塔身(とうしん)、さらに下の方形部分は基礎(きそ)と呼ばれる部位で構成されます。この塔身部に四角の輪郭を刻んで基礎部に格狭間(こうざま)が二つあるものは、「関東形式」と呼ばれ、四角の輪郭が刻まれずに基礎部の格狭間が一つの型が



板石塔婆の部分名称
「遺史園」より



宝篋印塔の部分名称
「遺史園」より

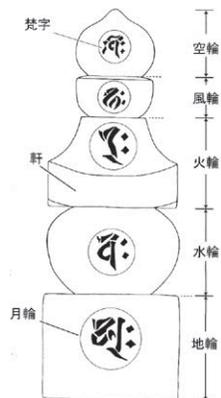
「関西形式」と呼ばれる基本型です。名称のとおり、関西形式は関西地方に、関東形式は関東地方に分布しています。ただし、時代・地方により多少の違いが見られます。例えば、頂上部の宝珠は、時代が下るとともに、膨らみが失われ、室町期・江戸期を通して先端が尖っていくという特徴があります(この特徴は、宝珠全体のもので、五輪塔・宝塔・石灯籠・擬宝珠(ぎぼし)でも同様です)。また、隅飾も時代が下るごとに、外側へ張り出す傾向があり、江戸期には極端に反り返る隅飾へと変化しました。基壇も次第に反花座などの飾りをもたない方形石の基壇へと変化しました。この他にも、塔身・基礎部の大きさの違いをはじめ、塔身に種子、仏像のレリーフを刻むものや、二重輪郭をとるものなど、塔によって様々な形態があります。

五輪塔(ごりんとう)も主に供養塔・墓塔として使われる仏塔の一種で、「五輪卒塔婆(そとうば)、五輪解脱(げだつ)」とも呼ばれます。五輪塔の形はインドが発祥といわれ、本来舍利(お骨)を入れる容器として使われていたといわれていますが、日本では平安末期から供養塔、供養墓として使われるようになりました。石材は安山岩(あんざんがん)や花崗岩(かこうがん)が多く使われ、小さいものでは凝灰岩(ぎょうかいがん)も多く使われます。他に木製、金属製、鉱物製(水晶)などの塔もあります。五輪塔は下から方形(地輪:ちりん)・円形(水輪:すいりん)・三角形又は傘形・屋根形(火輪:かりん)・半月形(風輪:ふうりん)・宝珠形(空輪:くうりん)を積み上げた形に作られます。五輪塔も製作された時代・時期、用途によって形態が変化します。特に、石造のものは変化に富んでおり、例えば一つの石から彫りだされた小柄な一石五輪塔(いっせきごりんとう)、火輪の形が三角錐(さんかくすい)の三角五輪塔、地輪(四角)の部分が長い長足五輪塔(ちょうそくごりんとう)と呼ばれるものなどの様々な形のものがあります。また、板碑(いたび)や舟形光背(ふながたこうはい)に彫られたものや、磨崖仏(まがいぶつ)として彫られたものもあり、浮き彫りや線刻(清水磨崖仏などに見られる)などで表現されています。

特殊な例としては、一般的に塔婆(とうば)や卒塔婆(そとうば)と呼ばれる木製の板塔婆や角柱の卒塔婆も五輪塔の形態を持ちますが、五輪塔とは言わず単に塔婆や卒塔婆といひます。卒塔婆(そとうば)もインドにおける仏舍利(ぶっしゃり)を収めたストゥーパの中国における漢字による当て字で、日本では略して塔婆や塔ともいわれます。

また、鎌倉時代末の正和3年(1314)銘の刻まれた「鰐口(わにぐち:個人所蔵)」が江ヶ崎の久伊豆神社周辺から出土しています。この鰐口(神社の鐘)には「寄進者行蓮(ぎょうれん)」の銘が刻まれています。周辺には江ヶ崎城も存在し、鰐口とほぼ同時期の館跡でもあり、関連性も推測されます。

市内では非常に数の少ない中世の文字資料であり、鰐口としても県内で最も古い鎌倉時代の貴重な資料です。



五輪塔の名称
「遺史園」より



正和3年(1314)銘鰐口(個人蔵)